
ライバル OR · · ·

ウッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバル OR . . .

【Zコード】

Z2389Y

【作者名】

ウツチー

【あらすじ】

拓也は空手歴11年

拓也には宿命のライバルがいる

だが拓也は宿命のライバルである桜に恋心を抱いて？

一期一会

プロローグ

一期一会

一生に一度しかない出会い

もし君がいなかつたら
今のオレはないだろう

今ほど強くなつてはいなかつただるつ

空手をやめてたかもしれない

弱いままの情けない男
で終わっていたかも知れない

オレはあの日からずっと
心にしまっている言葉が
ある

ありがとう

たつたこの5文字が伝えられない

それどころか
まともに話したことすら
ない

この気持ちを伝えたい
宿命のライバルである
君に

そして

好きな人である

君に

分かってる

オレと君は戦う運命にあるって

この感情は邪魔になる

でも

伝えたい

この気持ち・・・

第一話

主人公紹介

みなさんこんにちは
この話の主人公
内田 拓也

よろしくお願いします？
です

みんなからはウツチー
もしくはたあー君
と呼ばれてる

オレは中学3年で

4歳から空手を続けて来ている

オレの通っている道場は
草津支部

という道場で

最近、力をつけてきているダークホース的な存在である

この物語は
オレ拓也と
そのライバルの
村元 桜の話である

ここで気づいた人もいるかと思うが
桜は女である

なぜ女がライバルなのか？そう思う人もいるだろう

それはこれから話すのでお付き合い願いたい
(つまらないかもしけないが)
出来れば見て頂きたい

第一話

草津支部誕生

どうもこじてながせ??

拓也です

読者の皆さんに
オレと桜の関係について
知つてもいたために
過去の話しになります
退屈かもしませんが
お付き合いお願いします

オレはいつものように
草津幼稚園で友達の

堀 良君

田仲 健汰君

栗原 大器君

沢田 翔貴君

達と話をしていた

拓也「ねえねえ、りょう

、けんちゃん、

今日は何して遊ぶ?

くん、たいちゃん

しうぐん

(*^-^*)

良「ぼくはサッカーが

いいな

健汰「ぼくは野球」

大器「折り紙?」

翔貴 「 本が読みたい？」

拓也 「 またみんなばらば
じゃんけん？？？」

「 ら？ ジャア
でもめよつ

全員 「 ジャンケン・・

？ 「 お~いみんな~」

拓也 「 ビーフしたのひるぐる

？」

彼は藤田 寛
ひろ
彼もまたオレの友達

寛 「 何かしらないおにい
なんか白いふくに
人」

わやんが来てるよ

黒いベルトつけてる

健汰 「 みんなで行つて

みよつ

全員 「 うん」

そしてみんなで行つて見ると白い服の若い青年が先生と話していた

大器「先生このおにいちゃん

んだれ？」

先生「このおにいちゃん

はみんなに左手を

教えにきた
神宮

先生よ

神宮「こんにちは?

みんないっしょに

ね歩しきりつ

良「おもしろいこと?」

神宮「おもしろいことや

2階においで

全員「うん いくいく?」

そして2階にいくと

1つ上の
山下綾

と同じクラスの
松田 神無もいた

そしてオレたちは先生と

空手をした

オレはなにが楽しいのかわからなかつたが

みんなは楽しんでいて

気がついたらお母さんたちが向かえにきていた

拓也以外の全員が

空手を習いたいと声をそろえて言つてこた

母「たあーへんせじりある の？」

拓也「ぼくは・・・・・

おもしろこくな

でもあの服かつこ

お母さん僕もやる

(ビリショウかな

つたしなあ

いいし)

いつもして草津支部が
結成された

第一話（後書き）

上手くかけなくてすみません

第三話

第三話 昇級

拓也達が空手を始めて半年がすぎた

拓也達の頑張りを認めた
神宮は昇級試験を受けさせた
そして

拓也「ぼく、受かったかな

？」

健太「大丈夫でしょ」

大器「まあぼくは合格間違

えなしかな？」

翔貴「たいちゃんはいいな

じしんがあつて

寛「ぼくも不安だ?」

良「ぼくも

拓也「つよひ君は上手いか

大丈夫でしょ

全員「そうだね」

神無「先生きたよ」

神宮「おめでとうみんな

今日からみんな黄色

帯だよ

全員「やつた??」

健汰&大器「黒じゃない」

神宮「黒になることは

白 黄 緑 紫

茶色 黒といつ順番

なんだよ

に合格しなきゃだめ

健汰&大器「はーい」

神宮「みんなの新しい仲間

を紹介するよ」

井田 準君「ようしきな

準「みんなようしき???

りたいな」

僕もはやく黄色帯にな

全員「よろしくへ

神宮「みんなそろそろ試合
思つてこる」

「で、もうひとつ

健汰「試合つて相手をたお

したらかちなの？」

神宮「今みんながならつて

4人の審判にみせて

だ
よ

る型を

上手なほうの勝ち

大器「相手は男だよね？」

神宮「型だから女もいっし

ょだよ

大器「わかつた」

神宮「みんな頑張ろうな」

全員「はーい」

こうして

みんなの「デビュー戦」が
始まりうとしている

この時拓也は知らなかつたこの大会が拓也の人生を大きく変えることになるとは

そして

アイツと出会うとは

第三話（後書き）

毎度毎度下手な終わり方ですみません?????

次は宿命のライバルである桜との出会いです

第四話

第四話 デビュー戦&出会い

3月

それは毎年空手の試合が
行われる月である

その名を

少年大会?

(普通すざむ?)

この試合の結果次第では
県大会、全国大会にでられるのだ

拓也、良、寛、翔貴
「じやくせいするな」

大器&健太

「まあ優勝はぼくかな」

綾「ハハハ？」

神無「優勝できるとしたら
んでしょう」

良「僕には無理だよ」

あや「わたしも」

拓也「二人はうちのエース

だよ」

りょうひ君かあやちや

健汰&大器「エースはぼく

だよ」

寛&翔貴「だよね」

健汰と大器以外は良と綾をエースとして認めていた

空手を始めて11ヶ月

当然それだけたてば実力にも差が出てくる
頭角をあらわしたのが良と綾だった

今では頭一つぶんぐらい
とびてている

まあ本人たちには自覚がないのだが？

そして試合が始まった

健汰、綾、良はAブロック

翔貴、寛、神無、大器はBブロック

拓也はCブロック

拓也「ぼくひとりだよ？」

試合はAブロックから始まつた

期待の良と綾はその実力を發揮しデビュー戦で
ベスト16に入った

健汰は三回戦まで

初出場ということを考えれば上出来だろう

続いてBブロックでは

寛、翔貴、神無が二回戦までいった

本人たちも初勝利に喜んでいた

大器は」というと

持ち前の負けん気の強さと自分への自信で
四回戦までいった

初出場ではす”すぎるできだが、

本人は不満そうだった

拓也「みんなすごいなあ」

良「たあーくんなら大丈夫

だよ

健太＆大器

「まあ僕より上はむりだろ つけどがんばって

翔貴＆寛「ファイト」

神無「がんばって

綾「応援席でみてるね

拓也「ありがとうみんな」そつこつて拓也は試合に向かった

副審「それではこれよつ

一回戦を始めます」

「赤、内君」

拓也「は、はい」

審判「お互^{たが}い礼、はじめ」

拓也「え？ なになに あれ
えーと？ エーと？
せじまつてる
どうすれば
「は」

初めての試合

みんなは勝つたのに自分だけ負けられない

そういう目には見えないフレッシュヤーが拓也をおもひ

拓やは人一倍緊張しやすい不運な」とこ

声をかけてくれる仲間が

CBロックにはいない

拓也の頭の中は真っ白になつた

そして『氣づいたときこは

副審「判定」

4人の審判がバサッと旗を上げる

副審「白4、赤〇で白の勝

ち 礼

相手「ありがと『やさい』

した」

拓也はとりあえず列に戻った

そして拓やは自分が負けたことを理解した

拓也「負けた。ぼくは負け

た。もう次はない

みんな一回は勝つた

のに」

いつの間にか拓やは大粒の涙をこぼしていた

A「うわ、こいつ泣いてる

よ

B 「だつむ やーこ辻毛虫」

拓也は何も言わなかつた
怒ることすらできなかつた

拓也「やめてやる 空手な

なんて大嫌いだ」

拓也が空手をやめる決意をじよりとした時だった

? 「泣かないで」

そういって慰めてくれた

? 「くやしこよね わたし もくやしくて一生懸命

練習したんだ

私の名前はさくら

みりしきね

じゃあ私の番だから

行ってくれるね

そういうて桜はいった

気づいたときには泣き止んでずっと桜をみていた

そして

拓也「きれい」

ずっとそつそつぶやいていた

今でも忘れない

11年 たつた今でもしつかりと

脳裏に焼き付いている

例えるなら

彼女は「蝶」

「蝶のよひに舞い蜂のよひに止む」

時にきれいで時に力強い

彼女の型はまさしくそれだとそう思つた

そして拓也はそのとおり

「かつこいい？ ほくも

あんなふうになりたい」

結局、その試合は桜が優勝した

拓也「やべりやんか」

この時拓也はやべりにものすごく憧れをいだいていた
そして空手を頑張りつと

決意した

第五話

第五話 試合再び

試合が終わって一時間がたとつとしていた
拓也は車の中で考え方をしていた

拓也「結局、あのあとわく
かつたな？僕の名前
ありがとうございますといい
たかったのに」

父「そういえばさつき誰と
話してたんだ？」

拓也「やべりちゃんと
名字はしらない」

母「ちよつと待つでねええ
あつあつた
むりもと やべり
「ちやんね

と確かプログラムに

父「女なんかになぐさめら

れて情けないぞ」

拓也「うるさい？」

父「帰つたら練習だ

母「今日は疲れてるんだか

ら休ませてあげて」

父「冗談にきまつてゐじや
ないか？

にしても拓也
かわいい子だつたな
惚れたか？」

拓也「そんなことないこき

まつてゐじやん

この時はただの憧れとしか思つてなかつた

そしてその後の練習から
拓やは田の色を変えて練習した

神富「いいぞ拓也」

拓也「先生ぼくがんばる」

そして月日は流れ一年がすぎた

草津支部も人数が増えて

15人になった

ただ、変わったことがあるとしたら寛と翔貴が親の都合で引っ越し
たことだった

準「初めての試合で緊張す
るよ」

良「落ち着いてすれば大丈
から」

夫だよじゅん君上手い

拓也「ぼくも緊張しちるけ
どがんばろう」

準「うん」

健汰「今年はりょう君が優

勝かな」

大器「かもね」

自分達の力に自信を持っていた大器&健汰までもが
良の力を認めていた

それくらい良の力はすごかつた

今年は

神無、大器、良、準が

Aブロック

健汰と拓也がBブロックだった

綾は小学一年生の部で
ベスト16に入った

神無「やつぱあやつやんす

「」いや

綾「ありがとう 神無も

がんばって

Aブロックでは

神無、大器、準が一回戦までいった

準は初勝利を喜んでいたが大器は納得いかないようだ

そして我らがエース良は順調に勝ち進みベスト16までいっていた
後一つ勝てばベスト8

そしてその相手は

拓也「つよい君とやくらちが
手いんだろ」

やんつてどりっちが上

拓也は興味津々だった
良は白、桜は赤だった
そして

副審「判定赤4、白〇で赤の

勝ち 礼

良&桜「あつがとうござこ

ました」

拓也「やべいわしゃ そつて
やつぱつすい
あのつよい君に
んなて」

ストレートで勝

拓也「よーし今度は僕の番

だりよつの敵は僕が

とる」

気合に満々の拓也だった

拓也「よーし今度は僕の番

だりよつの敵は僕が

とる」

気合に満々の拓也だった

健汰は三回戦までいった

そして拓也は

また一回戦でストレートで負けていた

拓也はまた泣いていた

拓也「なんで僕だけ勝てないんだよ」

ずっと泣いていた拓也だったが桜を見てたらなぜか落ち着けた

そして泣いていたときには泣き止んでいた

ちゃんみたいになれ

拓也「どうした、拓也？」
るんだろ？」

拓也「やべりちやんにあつ
のって何だらう?
とりあえずかへりか
てぼくに足りないも
分からぬ？でも
やんに追いか
け」

そう心に誓つた拓也だった

果たしてそれは実現する
のか？

第五話（後書き）

先日、友達にいろいろと指摘されました
小説を書くのが初めてよくわからないので
アドバイスを頂けたら幸いです

第六話

第6話 立教支部

普段は練習が休みの火曜日なのに
なぜか

拓也、準、大器、健汰、良は空手着を着ていた？

それも

大器&健汰はわくわくしている様子である

これは拓也達が小学校に上がる少し前の話である

大器&健汰

「先生いつも同じ場所で

練習するの飽きた」

神宮「そつかもな

う～ん？？？？？

あ？ そうだ？？

「？」

神宮「先生が教えている

立教支部といつと」

か？」

があるいってみない

大器「りつきょうしふ？」

健汰「変な名前」

神宮「みんななかなか強い

んだけどな」

大器&健汰

「ピク？ 行く」

神宮「他のみんなはどういっす

る?」

良「ぼくも行きます」

準「ぼくも行こうかな」

綾「私は遠慮します」

神無「わたしも」

神宮「拓也はどこにある?」

大器「たあ〜くんも行こう

ぜ?」

健汰「そうだよ
「

良「頑張りうよ
「

準「たくやくんもいこうよ
？」

拓也「うん
「

神宮「決まりだな？じゃあ
幼稚園に集合！」
来週の火曜日に立教

全員「はい
「

そして現在にいたる

今、みんなは立教幼稚園の門の前に立っている

立教幼稚園ではたくさんの中学生が練習していた

大器 & 健汰

「でかい？」

拓也 & 準 & 良

「緊張するよ」

驚くのも無理はない

拓也達の草津支部は一階の一部署だけをやっているのにに対して

立教支部は立教幼稚園の外全体を使ってやっているのだ

大きな滑り台にブランコ

たくさんの遊び道具に

こどもたちはうれしそうで空手のことを見れていた

すると後ろから

神宮「よく来たな 入れよ

」

そして

神宮と草津支部のみんなが入ると

「」にちは

とこう大きな声で挨拶していた

草津支部のみんなはなんか萎縮していく

まあ無理もないが

神宮「おーい慶太ちょっと

来てくれ

慶太「はい」

神宮「この子達の面倒を

みてくれ」

慶太「はい」

慶太「ぼくの名前は

仲村 慶太

よろしくね

(なかむ

みんなの名前は?」

（けいた）

みんなの名前は?」

大器&健汰

「大器と健汰だよ

よろしくね」

拓也&準&良

「拓也、準、良です

よろしくお願ひします」

慶太「みんな元気だね」

神宮は慶太達が話している間に話を進めていた

神宮「みんなこの子達は
先生が教えている
た子達だ
今日はこの子達と
試合をするからな」

和人＆雅弘
「強いんですか？」

神宮「戦つてみれば分かる
は残ってくれ
が見学してくれ」

今から呼ばれたもの
後のものはすまない

そして選ばれた五人以外の人達は隅にいた

雅弘と和人は当然選ばれていた

そして

草津支部 VS 立教支部の
戦いが始まる

?注 相手はみんな幼稚園児です

第六話（後書き）

「んにちは

最近更新が送れてすみません？？？

受験まで後5日しかないんで

なかなか更新ができません

受験が終わったらまた頑張るのでよろしくお願いします？

第七話（前書き）

入試終わりました？

第七話

第七話 移籍

神宮「それではこれより
の試合を始める
らな

お互い礼

草津支部対立教支部
審判は先生がやるか

全員「お願いします」

神宮「慶太、草津支部の順
番はお前が決めてく
れ試合は団体戦形式でやるからな」

慶太「分かりました」

「みんなどうしようつか?
かな?」
「」の中で一番上手い子は
だれ

全員「良くんです」

慶太「じゃあ最後は良君で

いい」

良「分かりました」

慶太「じゃあ

一番目、健汰君

三番目、準君

目、拓也君

五番目、良君

二番目、

大器君

四番

これで行こう

全員「はい」

大器&健汰

「団体戦つて何?」

健太「団体戦っていうのは
つて先に三勝した方

ね一チーム五人で戦
の勝ちだよ」

全員「なるほど」

拓也&準

「じゃあけんちゃんみたい

ちゃんと良君で三勝だね

」

大器&健太

「任せといて」

良「僕が勝てるか分からな

いよ」

慶太「拓也君、準君そんな

人に頼つてたって

上手くなれないよ

そんないい加減な

気持ちでのぞむなら

今すぐ帰れ

自分が勝つつもりで

やらなきゃ

だめだ」

拓也&準「はい

「めんなさい」

慶太「分かればいいんだよ

頑張ろつな

やつ言って拓也と準の頭をなでた

神宮「決まったみたいだな

それじゃあ始めるぞ
型は拳雷の型」

注？拳雷の型とは基本中の基本で試合でも一一回戦で主に使われる

神宮「先鋒前へ」

草津支部の全員
「先鋒つて何？」

慶太「試合の順番のことだ

よちなみに

一番目を先鋒

一番目を次鋒

四番目を副将

二番目を中堅

五番目を大将つて

いうんだよ」

全員「へえー」

準「大将つてなんかかっこ

いい」

慶太「大将は一番上手い子

がやるんだ」

拓也「だから良君が大将な

んだ」

神宮「先鋒はやくしる」

健汰「勝つてくれる」

全員「頑張つて」

神宮「始め」

健汰は負けた

神宮「次鋒前へ」

大器「僕は負けないぞ」

しかし

大器も負けた

神宮「次、中堅」

準も負けてしまった

これで三勝で立教支部の勝ちが決まった

神宮「次、副将

拓也はやくじゅ

拓也は自分が負けると思っていた。それもそのはず 草津支部で
勝つたことがないのは拓也だけだったから誰がみてもわかるくらい
拓也の田はしんでいた

そんな時

「ばちーん」

鈍いおどがなつた

慶太が拓也を殴っていた

慶太「前にも言つたはずだ

ら帰れ」

いい加減な気持ちな

拓也「ひっく？」

慶太「悔しくないのか皆が

負けて

オレがかたきをとつ
てやろうと思
わないと

か」

拓也「悔しい」

慶太「だつたらぶつけて

こい」

拓也「はい」

和人「早くしてよ」
拓也の相手は和人だつた

神宮「始め」

拓也「絶対勝つ？？」

神宮「こんな拓也初めてみ

すごい気迫だ

慶太のやつ拓也の力

るな

を引き出したな」

慶太「最初に見たときに

眠つて いるような

みたけど

今はな

もしかしたら力が

きがして副将にして

ここまで

今の和人じやあ勝て

ない

神宮「拓也の勝ち」

草津支部のみんな

「やった？？」

立教支部のみんなはすでに三勝しているので
今の試合を見ていたのはほんの少しだった

拓也「初めて勝つた」

慶太「やればできるじゃん
なよ」

その気持ちを忘れる

拓也「はい」

拓也は初勝利を草津支部のみんなで喜んでいた

慶太「こいつは化けるかも

しれないな」

神宮「次、大将」

次は良対雅弘だつた

雅弘もかなりの実力者

だが、良はその上を行く誰から見ても実力差は明らかだつた

神宮「良の勝ち」

草津支部のみんな
「さすが良君」

立教支部のみんな
「あいつすげーよ

雅弘に勝つたぞ」

そして合同練習に入った

神宮「今日はここまで」

全員、「ありがとウ」や「ま

した

神宮「草津支部のみんな

L

大器&健汰

「先生僕もつと頑張るよ」

準「僕も」

拓也「僕も？」

神富は咄がせりやる氣になつてくれて満足しつだ

神富「良じつしたやつきか

ら黙つたまんまで」

良「先生、僕は立教支部に

移りたいです」

全員「え――?????」

良「いじにほたくさんの

時間も多い

たい」

先輩達がいるし練習

僕はもっと強くなり

神富「良、わかつた他には

いないか?」

大器「僕は草津支部が好き

ちたいからバス」

だし、草津支部で勝

健太「僕も草津がいい」

準「良君がいなくなるのは
残る」

寂しいけど僕も草津に

拓也「先生、僕も立教支部

(みんなと離れるのは辛いけど幼稚園
や試合で会えるしそれに僕も強

くな

りたい

ここで練習すればたべらちやんこ

追いつけるかも)

神宮「分かった

ここ

にこい

じゃあ来週から

拓也&良
「はい」

いつして拓也達は立教支部に移籍した

第七話（後書き）

なんかスポコンになりすがってるような？

次は恋愛要素を入れていきたいと思います

第八話

第八話 デート前編

拓也達が立教支部に移籍して二週間が過ぎた
良の方は実力をみんなに認められ気づいたら良の周りには人がたくさん集まつてた

拓也は人見知りのせいで
なかなか馴染めなかつたが

和人「おーい拓也」

拓也「えーと」

和人「和人だよ」

拓也「よろしく和人君」

和人「よろしくな
ツ すごいな良とか言つ
それにしてもアイ
たけ？」

拓也「うん。 良君はすごいやね」

和人「でも、拓也もすごいつて？一緒に頑張ろうな」

拓也「ありがとう。 頑張ろうね」

雅弘「俺は雅弘。 よろしくな。 一緒に頑張ろう」

拓也「うん。 よろしく」

拓也にもやつと友達ができた

慶太「よお拓也。」には

慣れたか?」

拓也「あー!慶太先輩お疲れ様です。まだ慣れませんね」

慶太「ゆっくりでいいからな。わからなことは何でも聞いてくれ
」

拓也「はい。ありがとうございます」

練習が終わり拓やは
家に帰つてきてゆっくつしていた

母「拓也電話だよ」

拓也「誰から?」

母「優ちゃんから」

優ちゃんとは拓也の幼なじみである
水戸 優である

拓也「もしもし、優ちゃん」

優「もしもしたあーくん? 優だけど? 明日ひまかな?」

拓也「明日は日曜日だし特に何もないけど」「

優「あのさ明日一緒に健康公園に行かない? 久しぶりにたあーくんと話したいし」

注? 健康公園とはとても大きな公園でたくさんのアスレチックやプールに芝生

バスケットコートなどがある

拓也「うん? こりよ。こいつらのメンバーだよね」

拓也のいろいろいつものメンバーとは

優の兄である真一と

拓也と優の幼なじみである広太郎とその兄である一正のことである
一正是拓也達より一つ上 真一は一歳年上である

拓也達のお母さん達が

高校時代のクラスメートで大親友だった

だから

幼稚園じゃ違うけれども

この五人よく一緒に遊んでいてとても仲がいい

来年は拓也達は同じ小学校に通う予定だった

しかし

運命のいたずらか

優達は岡山。

広太郎達は広島に引っ越ししてしまつ

みんな来週には引っ越ししてしまつ

寂しくなるが一生会えなくなるわけではないので
拓也はそこまでショックはうけていなかつた

優「あの、えーと、その (ドキドキ) たあーくん
と二人で行きたいなあ～なんて思つてたりしてたりしてなかつ
たり
ダメかな??」

拓也「いいよ?」

優「やつた(^ ^)」

拓也「でも、健康公園歩いて歩いて行くことはありますと遠くない？」

優「大丈夫だよ。優のお母さんが車でおくつてくれるって」

拓也「分かった。明日ね

優「うん。ばいばい

拓也「お母さん、明日は優ちゃんと健康公園で遊ぶことになった。
おまちゃんが迎えに来てくれるって」

母「分かった。楽しんでおいで」

場所は変わつて水戸家

優「お母さんたあーへん〇〇だったよ~明日はようじへ
「へじひよりよ」

「あーのへおへりまつべくべく渡り越してだからさとたあーくさんあひてん

優「はーい。明日またのしみだな?」

果たして優は拓也に言つたことを見るとなんと云ふられるか?

後編に続く?

第九話

第九話 デート中編

今日は拓也と優が一人で遊び田である。優は何時もよりもはやく起きていた。

そして

優は布団の中で拓也のことを考えていた。

優「あーくんとは同じ月に同じ病院で生まれたんだよな。お母さん達が仲良しだからよくあーくんと一緒に遊んだ。広ちゃんよりも遊んだ回数が多いかも。いつの間にかあーくんが近くにいるのが当たり前のようになつてた。このまま同じ小学校、中学校、高校に行くんだつてそう思つてた。でも、突然きまつた引っ越し。たあーくんに会えなくなる。そう思うと胸が苦しかつた。そしてやつと分かつた。私はあーくんのことが好きだつてことに。だから今日は頑張ろ」そう決心する優だった。幼稚園生でこんなことを考えるなんてやはり女の子の精神年齢は実際のとじよるも上と言われるだけある

優の母「優もういじません食べなさい。」

優「は」い「

そして優はごはんを食べた。

そして車に乗つて拓也の家に行つた。

優「おはよーたあーくん」

拓也「おまけに優ひさん

拓也の母「おはよう真理今日またおひしゃくね」

優の母「おはよう一美任せてよ」

拓也「お母さん行つてきます？？」

車の中では

いろいろなはなしをしたり歌つたりした

拓也&優

「春色の汽車に乗つて海に連れて行つてよ。」

優の母「（古?…?ひょつとあんた達何歳よ?…もつと幼稚園生）りじ
い歌にしなさいよ」

心中でツツ「//」を入れる優の母だった。?

拓也&優「赤いスイートピー？」

歌い終わると同時に公園に着いた。

優の母「二人とも着いたよ？楽しんできてね。夕方には迎えにくる
からね。優、片方の携帯預けとくから何かあつたら電話して」

優の母は携帯を一つ持つていて一つを使い分けている

優「ありがとうございます。行つてきます」

拓也「おばさんありがとうございます」

優の母「はい」

そして拓也と優は歩きだした。

拓也「優ちゃん、何はどうする?」

優「まずはロープウエーに乗って向いの子ども広場に行こう」

拓也「うん」

拓也と優はロープウェーに乗った

?（無料です）

ロープウェーの中

優「ねえ、たあーくんは好きな人いるの？（きこちやつた????）

「

拓也「うーんまだが好きかなんて考えたことないから分からないや

優「そうなんだあ（じゃあ優にもチャンスがあるかもしれないな?）

「

拓也「優ちゃんは好きな人いるの？」

優は顔を真っ赤にしている

優「えー????わ、わたし?あの、その、えーと、（ぎみじみよう
これってチャンスなのかな?）

優がそう考えるときに拓也が声をかけてきた

拓也「優ちゃんが私っていうの珍しいね」

優の普段の一人称は「優」だから拓也は少し不思議に思っていた

優「優も時々は私つてこうときもある
「

拓也「そうなんだ。あ？着いたよ

「うじて拓也と優は降りていった。

優「(せっかくのチャンスだったのに?)」
心の中で思ひ優だった。

拓也「優ちゃんアスレチックマウンテンに着いたよ右から登るそれ
ともかく?

優「(そうだ?アスレチックマウンテンの頂上でたまーくんに言お
う)

第九話（後書き）

まだまだ続きます

第十話

第十話『マークマウンテン』後編

優は考えていた。

優「確かにアスレチックマウンテンの頂上は左からの方が近道だった気がする。はやく頂上について心の準備をしとおつ」

拓也「優ちゃん????」

いつもと違う優に拓也は気づき声をかけた

優「あーくんは右からで優は左からで競争ね。スタート

そして優は走っていった。

拓也「優ちゃんってあんなに走るの早かつたっけ?何か今日はすごいやる気だな?まあ僕はゆつたり行こ」そして、拓也も行った。

優はといつとものすごい勢いで走った後、長い長いトンネルに苦戦していた

優「暗いのこわいよ？近道は右だつたかな？よくよしても仕方ないいくぞお？」

優は懸命にじんじん進んで行つた。

優の推測どおり近道は右だつた。優の方は上級者向けだつた。

一方、拓也はどうと

拓也「頂上は気持ちいいな？？」

拓也はすでに頂上についていた。

拓也の方は初心者用といふことも会つたが拓也の家族は登山好きなのでかなり山を登つてゐる

拓也も三歳の頃から山上に登つており近いしきで富士山も登る予定だから拓也は

通称「薩摩富士」と呼ばれる開門岳を向回も登つて鍛えてきた。

拓也にとつてはアスレチックマウンテンに登ることなど難しこじとではなかつた。

拓也「上から眺める景色はきれいだなあ」

拓やは頂上の景色を見ながら考へ」とをしていた

拓也「そういえば僕つてさくらちゃんとともに話したことなかつたな。今度話してみようかな」

そう考へて矢先景色を眺めていると

拓也「あ？あれはさくらちゃんだ」

なんという偶然桜も健康公園にきていた。
桜は一人でブランコにのつていた。

拓也「さくらちゃん一人で来たのかな？」

拓也がそつ思つて見ていると桜の前に一人の男が現れた。歳は拓也
達と同じくらいである。桜は満面の笑みで男をむかえている。

拓也「なんださう？」の氣持ちはよくわからないけどあまりいい

気分ではないな。それになんでやべりやんのあの笑顔を見たとき
胸がドキドキしたんだろう?「

この時拓也は思っていたこの笑顔が自分に向けられることのない
どんなにいいものだらうかと。

拓也はずつと桜達を見ていた。いつも

「あーくん」「あーくん」「あーくん」

「たあーくん」「たあーくんてば」「たあーくんてば?

拓也「あ?優けやせ?」

優「あ?優ちやん?じゃなこよ?わつかひずハーヒヅツヒツ
れ。心配して何回も呼んでるのに反応しないし」

拓也「ひめんじめん。ちゅうと考え事してたか?」

そつ拓やは周りの声も聞こえないほど集中して桜達を見ていたの
だった
その間に優が頂上についたのだった。

優「考え方? 何かあったの」

拓也「何でもないよ。それよりこれからどうする?..」

優「どうあえても少しはおもつたりしてから頬ほほを食べよう(たあーくんがこの状態じゃなあ)」

拓也「分かった?」

そして二人は景色を楽しながらアスレチックマウンテンを降り、芝生に敷物をしいて毎ごはんを食べていた。

拓也達はお互いの幼稚園での話しなどで盛り上がっていた

拓也はふと何かを思いだしたかのよつて話をしを変えた

拓也「やつこさんはいつでも優ちゃんロープウェーで何かいいかけてなかつた?」

優「えーと、そのたあーくんと話すの楽しいなーって

する」と拓也の表情が真面目になりました

拓也「優ちゃん

優「な、何?」もしかして今まで『氣づこちやた』

拓也「トイレに行つてくる

優「……………? 分かった

この時優はカラスがアホーアホーと言っている気がした?

優「(たあーくんのバカ)」

心の中で思ひ優だった。

一方拓也はトイレに行くところは口実で本当の目的は桜を探すことだった

拓也「なんとか分からぬけどさくらちゃんのことがすいへ気になる

懸命に探す拓也だったがあきらめて帰ってきた

優「お帰りたあーくん。フリスビーしない?」

拓也「うん。いいよ。」

そして二人はフリスビーを始めた。

優「えい?
」
ビュー

パシツ
拓也が捕る

優「ナイスキャッチ」

拓也「もう何回投げたかもわからないや。え?あれってさへじゅうや
ん」

ド力

拓也の顔面に直撃した

拓也「痛い」

優「ごめん。たあーくん。大丈夫?」

拓也「うん。」めんどーとしてた（？）までみんなの方

に飛ばして捨いに行って話してみよう。話せないの気持ち分かるかも（行くよ。）

優「つとここんな高いの捕れないよ」

フリスビーは拓也の思惑通りに桜の方に

拓也「ねらいどおり
のはずだったが

ククツ

拓也「そんな馬鹿な

フリスビーを弧を描いて拓也のもとへと返ってきた

優「たあーくんす」い？？」

拓也「ハハハ？。あっちのベンチで少し休もう

優「うん」

拓也は黙つてベンチに座つていた。

優は心配して拓也に話しかけたが反応をしない

優もとうとう我慢できずに拓也の頬にビンタした

拓也は何があこつたかわからかった

優「たあーくんなんかもう知らない。たあーくんなんて大嫌い」

そつと優は走りだした

拓也はすぐさまいか分からなかつたが冷静に考ふ

拓也「優ちゃんと遊びに来たのをやけにこのことはほがり考えて
た優ちゃんが怒るのも無理はないなあや」

そつして拓やは優を探す

拓也「あれから何時聞へりて探したらだらう。ひいだらう。もひくべ聞へぬ。
急がなきや」

拓やは懸命に優を探す

そして。やつと優を見つけた。優は大きな犬に追いかけていた。

拓也は優の前に立ち犬を睨み付けた。

犬は逃げていった

優「あーくんありがとう」

拓也「優ちゃん、ごめん。僕、せつかく優ちゃんと遊びに来たのに
つまらなくしちゃって」

優「ううん。優の方こそ叩いちゃってごめん。さつきのあーくんか
っこよかつたよ。あーくんのこと大嫌いって言っちゃたけど本当
は優、あーくんのこと大好きだよ（言っちゃた？）
するとその時パアッと辺りが光りだした。

健康公園はよゐのイールミネーションでもあります。

優「（このタイミングで？まるでよくせつたって言つてゐみたい）

拓也「僕も優ひやん好きだよ」

優「（やつた？？？）」

話しあは最後まで聞くものである

拓也「だから、これからもいい友達でこようね」

優「うん。（今はこれでいいや。でもこつか） そうだたあーくんこ
れ」

そつ言つて優はポケットから何か取り出した。

拓也「これって僕？」

優から渡された物は空手着をきた人形だった

優「うん。 そうだよ。」

拓也「黒帯なんだあ

優「うん。 ずっとたあーくんに持つてて欲しいから

拓也「ありがと。 大事にする

優「優のこと絶対に忘れないでね。」

拓也「当たり前だよ。」

優「そろそろ帰らうか

優は携帯で優の母に電話して迎えにきてもらひった。

一週間後

優は引っ越ししていった。

優「たあーくん氣づいてくれるかな？ あの人形の秘密

あの人形には

小さく相合い率でお互いの名前が書かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2389y/>

ライバル OR

2011年12月1日16時50分発行